

画家の場合

大村伸一

画家は今、目の前のキャンバスに向かって絵を描き続けている。

これが自分の最後の作品になると彼は感じていたが、ここ数年、いつもそれが最後の作品になると確信しながら描き始めているのに、描き終えればそれほど間をおかず次の絵を描いている。

部屋は広く、きちんと整頓されていて、これまでに描いた絵やスケッチのたぐいも壁にそって据え付けられた棚に縦にして置いている。電灯は自然光に近いものになっているが、勿論彼の目から見れば室内の灯りは自然の光とはまったく異なる。ただ、自然の光が常に必要なわけでもないので、それによって苛つくことはもうない。

整頓されゴミひとつないアトリエの中で彼以外の誰かが見れば混乱を見つけ出す場所がパレットの上だ。そこには明るい色くらい色、さわやかな色しゅうちやくの色、恒星のきらめきの色衛星の透明な色、色にあふれた色、色のない色、すべて必要な色があった。彼以外の誰かにとってそれは乱雑に混ぜ合わされた色の混乱にしか見えなかつただろうが、彼にはそれは整然と配置された必要にして不可欠な色彩の周期律表だった。

彼はそのパレットから色をすくいあげキャンバスに乗せていく。筆が絵の具を混ぜ合わせるたびに、絵の具に含まれている香料のかおりが部屋のなかに広がる。それは色の定着剤であつたり分解成分であつたりあるいは融合効果であつたりもするが、画家はそれを絵の具の香料だと考えている。色にはそれにふさわしい香りというものがある。絵を描きながらときどき筆を止め目を閉じ画家は部屋の中にひろがるそのかおりによって、今描かれているものを認識する。目で見ているものと香りが伝えるもの間に齟齬がないか、そのようにして画家は確認する。

彼はときおり絵から視線をそらし、絵のモデルとなっているものにも焦点を合わせる。描くべきものは一度見ただけですべて記憶しているので、モデルに目を向けるのは細部を確認するためなどではない。モデルを見ても、そこに、描くために必要な新しい要素を見つけ出すことはない。彼がモデルを見直しているのは、そこにまだモデルが存在していることを確認す

るためだ。彼の画法はモデルの姿をキャンバスの上に生き写す。彼が50年あまりの歳月の中で編み出した画法と彼自身の才能によって、写真ですら達することのできない領域に彼の絵はいた。ここ十年あまり、彼が怖れているのは、彼がモデルをキャンバスの上に移してしまうことによって、モデルがこの世界から消えてしまうのではないかということだった。勿論、そんなことは今まで一度も起こらなかったのだし、現実になんかそんなことが可能でないことを画家は理解していたが、キャンバスの上に次第に現れるものを見てみると、それがあまりにもモデルと同じであるから、画家は絵が完成に近づくと、現実のモデルがもういなくなったのではないかと感じるのだった。

絵を描いている間、彼は勿論何も話さない。アトリエの中で聞こえるのは彼の絵筆がキャンバスに触れるときの音だけだ。それはたっぷり含んだ絵の具をキャンバスに落とすときのすこし濡れた音であったり、絵の具をほとんど失った筆がこすりつけられるときのかきついた音であったりしたが、画家にその音楽が聞こえているのかどうか、画家自身にもよくわからなかった。絵を描いているとき音は意識から消え去り、描き終えた後にその過程を思い返す必要などはなかった。

絵の完成が近づき、彼の手の動きが少しずつ繊細になり間遠くなってゆく。微妙な細部に細い筆で手を入れ、絵はさらに現実のモデルに近づく。キャンバスを凝視する画家は、絵と記憶をたんねんに比較し間違いがないことを確認している。モデルにもときおり目をくぼる。モデルはまだそこに存在している。絵が完成した瞬間、モデルが消えるのではないかという思いに、画家は最後の一笔を加えるのをためらう。しかし、絵を完成させたいという欲望に逆らうことなどできない。彼は筆をパレットに乗せてこれで完成だと確信する。

画家はそれまで腰掛けていた椅子を降りて、イーゼルごと完成した絵を回転させ、絵の完成を待ち望んでいた人にその絵を見せる。絵は肖像画であり、それまでモデルになっていた人物と区別がつかないほど完全に描かれている。そして、その絵を見せられたのはここまでこれを読んできたあなたである。

あなたは、その絵が自分と瓜二つであることに驚きそんなことが可能なのだろうかといぶかしむ。しかし、それがあまりにも自分にそっくりであるため、自分こそが画家によって描かれた絵であることにはまったく気づかない。